

## 各コーナー説明文

以下は、ダミー原稿です。なお、最終的に全て和英表記となります

### 近現代美術室 A 室前半のタイトル紹介

#### 作品と語ろう

この展示室では、福岡市美術館のコレクションを代表する作品を展示しています。

キーワードは「語り合い」です。最初にご紹介する飯山由貴の《作品の前で語られた、いくつかの会話》は、当館で行っているガイドボランティアツアーの会話を主題にしたもの。何気なく語り合う中で人それぞれのものの見方が浮かび上がるという、会話の楽しさ、奥深さが伝わってきます。そのきっかけになっているのが、ラファエル・コラン《海辺にて》をはじめとする、当館のコレクションです。

展示室に並んだ作品同士は、まるでおしゃべりしているようです。それぞれに違う背景を持ちながら、隣同士で響き合う色や形があったり、テーマが対照的だったりしています。この「語り合い」を、自由な目線で楽しんでみましょう。

そして、実はこの展示室での会話の主演は、皆さんです。「静かにしなきゃ」「マナーが…」といった堅苦しいことはいったん忘れ、肩の力を抜いて、心を動かして、気軽に作品との語り合いを楽しんでください。実際におしゃべりしても OK です。(435 字)

### 近現代美術室 C のタイトル紹介

#### 4つの視点

この展示室では、福岡市美術館のコレクションのうち、近現代美術を4つのテーマにわけて紹介しています。当館は、1979年の開館以来、古美術・近現代美術の収集を進めてきました。その数は16000点以上に及びます。近年は若手アーティストの支援にも取り組み、新たな作品も毎年収蔵しています。

40年以上に渡って形成されてきたコレクションは、様々なルーツを持ち、造形もテーマも広がっています。今回の展示で紹介するのはその一部ですが、作られた時代や社会を映し出していることが、すぐにわかるはずです。

ぜひ、気になるテーマをたどって展示室を歩いてみてください。きっと、驚きや発見があるはずです。(279 字)

## 近現代美術室 C のエリアごとのコーナー紹介

### 1. 広がる絵画の地平

絵画に何ができるのか、多くの作家たちが実験を試みてきました。まずご覧いただくのは、ルイ・カーヌの作品です。大胆なやり方で「絵画はベッドのシーツやカーテンと同じく、現実にある布なのだ」と示しています。

1950年代以降の作家たちは、私たちが普段意識しないキャンバスや絵具の「もの」としての質感に目を向けました。例えば、田部光子は電気ゴテの跡を画布キャンバスに残し、松谷武判はボンド（よく学校の工作で使われるものです）を使いユニークな表現を生み出しています。

1980年代には、世界的に絵画の可能性が見直されていきました。菊畑茂久馬、森山安英は、前衛芸術運動に身を投じた後に絵画に回帰した作家です。中村一美は鮮やかな色調と大画面で見る者を圧倒します。(301字)

### 2. 移動、ひらめき

作家たちは、旅を通して新たなひらめきを得てきました。

多賀谷伊徳、オチ・オサム、サム・フランシスは、異国での体験をインスピレーション源に新たな絵画表現を獲得しました。

藤浩志の《P.N.G》は、1986年から2年間滞在したパプアニューギニアで出会った事物を素材に、常識に問いを投げかけています。パット・ホフィーも、ベトナムの工芸職人と協働を通し、政治的なメッセージの脆さを表現します。

工藤哲巳は、青森のねぶたを思わせる表現を取り入れ、手塚愛子は奈良時代の染織文様と現代の絵文字などを織り合わせ、ほどくことで作品を制作しています。彼らは、地域に固有の伝統文化を引用しながら、移動・文化の混ざり合いがもたらす創造的な可能性を示しています。(308字)

### 3. 仮想の風景を眺める

日々私たちが目にするのは、スマホや新聞、テレビなど、多様なメディアが作り出す「風景」です。このコーナーでは、そんな「メディアと風景」との関係をとらえた作品を紹介しています。アンドレアス・グルスキーは、写真のコラージュでグローバル経済の「風景」を表します。浦川大志は、ネットで得られた画像やスマートフォンで撮った写真をもとに福岡の土地を描きました。

家族写真は、「メディア」の進化の中で重要な位置を占めつづけてきました。ちかちかと光るのは、約100年分の家族写真を人物の部分だけ切り抜いて作られた鈴木淳の作品です。メディアが記録し、再生するものは何か？と私たちに問いかけます。 (284字)

### 4. 想像の翼

ここは、色と形の響き合いを楽しんでいただくコーナーです。多種多様な作品たちに共通するのは、重力に抗い、はばたく表現です。

シャガールの《空飛ぶアトラージュ》は、空想上の生き物が戦禍の空を飛ぶ姿が描かれています。アンゼルク・キーファーの作品と並ぶと、「空を飛ぶ」という願いが、戦争にも平和にも結びついていることに気づかされます。一方で、塩田千春の《記憶をたどる船》では、古い写真たちが静かに浮遊しています。

インカ・ショニバレ CBE と日高理恵子の作品は「樹木」を媒介に、時空を超え対話します。

ぜひ想像の翼をはかせて、作品を鑑賞してみてください。 (294字)